本県ロケ地として人気

支援数過去最高
「聖地」にファン

映画やドラマを撮影するロケ地として、本県の人気が高まっている。ぐんまフィルムコミッション（FC）がロケを支援した件数は昨年度に過去最高を更新したが、今年は10月までに前年を上回るペースで推移している。本県のブランド力向上と観光などを含む県内経済への波及効果を期待し、県はロケ誘致に力を入れる。全国の自治体間で競争が激化する中、関係者は製作者側と地元との信頼関係を継続させる取り組みの必要性を指摘している。

ロケ地としての人気が高まっている
高崎中央銀座商店街

県が運営するぐんまFCは、2013年12月に設立。22年度のロケの支援件数は48件で、過去最高を更新した。本年度も4～10月までに31件と昨年を上回るペースで、相談件数も268件と高水準となっている。

どこか懐かしさを感じられる高崎中央銀座商店街（高崎市）では近年、「シン・仮面ライダー」「機界戦隊ゼンカイジャー」など映画やドラマの撮影が増えている。商店街で老舗菓子店「観音屋」を営む中川正人社長(71)は「公開をきっかけに、東京や大阪など県外からもファンが来てくれている」と喜ぶ。

高山村の「ロックハート城」もロケ地としての人気が高まり、〝聖地〟として訪れる人が増えている。広報担当者は「ありがたいことに、作品のファンが押し寄せてきている」と驚く。前橋市でも市水道局を舞台とした映画「渇水」が6月に全国で公開。同市の林牧場（旧赤城クローネンベルク）では、テレビ朝日の人気ドラマ「相棒」が撮影されて話題となった。

こうした映画製作を支援するのは、県内各地のFCだ。県内では現在、11団体が活動し、製作者とロケ地との調整役を担う。ロケは数十人～数百人単位で行うため、宿泊や飲食など地域への直接的な経済効果も見込まれる。

県eスポーツ・クリエイティブ推進課の大島嗣乙さん(45)は「多彩なシチュエーションが撮れるロケ地が多いのが本県の魅力」と説明。ブランド力向上と経済への波及効果に期待し、ロケ誘致に力を入れる。

一方で、国内ではロケ誘致を巡る地域間競争も過熱している。全国にはロケの際の交通費や、宿泊費の一部を補助する制度を創設した自治体もあり、行政とFCが一体となった誘致が進んでいる。

高崎FCを運営するNPO法人、たかさきコミュニティシネマ代表理事の志尾睦子さん(48)は「誘致には製作者側と地元との信頼関係が鍵。関係性を一過性のものにせず、継続的に続けていくことが大切だ」と指摘している。（稲村勇輝）

2023.11.30.上毛新聞 社会面